

子どもと地域を支える活動の自立

小国からの咲顔

代表 大波 尚美さん



「食の安全プロジェクト」で企業から寄贈された食品を受け取る大波さん(左)。

原発事故により、あたりまえの日常が消えた。母として放射能の不安・苦悩から立ち上がり、県外支援団体のリードで保護者グループの活動を始める。研修やたくさんの人たちとの出会いを通じて、団体の会員制度と活動の柱の構築、複数による事務局体制を整え、自分たちで資金調達や活動計画を練り活動するようになった。



大波尚美(おおなみ・なおみ)
神奈川県出身。結婚後から福島県伊達市小国地区で暮らす。震災前は医療機関で医療事務として勤務。現在は、夫と子ども2人の4人暮らし。震災後2011年6月、地域の保護者らと「小国からの咲顔」を立ち上げる。

2012年4月、大波さんは…

福島第一原発事故の放射能汚染により「ホットスポット」と呼ばれた福島県伊達市小国地区。大波尚美さんは東日本大震災の前から自然豊かなこの地に住み、家族と充実した日々を過ごしていた。しかし、震災によってその日常が消え去った。

大波さんは震災直後から、地域の子どもの保護者らと放射能の不安と闘ってきた。地域の保護者仲間と共に放射能から子どもたちを守ろうと、保養キャンプの実現のために動き、県外の団体の支援を受け、第一回目の保養キャンプ「福島っ子サマーキャンプ」を実施。「少しでも放射能の線量が低い地域で子どもを過ごさせたい」という小国地区の保護者の切実な思いが集まり、地区のほとんどの子どもたちが参加した。この夏のキャンプの実施をきっかけに2011年6月、地域の保護者が中心メンバーとなって「小国からの笑顔」を設立。その後も保養キャンプは県外支援団体と連携しながら実施している。ほかにも保護者の心の内を吐き出してもらう場（サロン）を作り、被災者が抱える悩みを関係機関に伝えるなど活動してきたが、その際の企画運営・資金調達・会計・事務局業務なども県外の支援団体にサポートしてもらっていた。そんななか、震災後1年経た時点で「NPOのことをまったく理解していないし、キャンプやサロンの現場で

活動してくれる人だけでなく、事務作業を担ってくれる人材の確保やそのための勉強ができれば」と考えていた。

しかし、日常と活動に追われる日々で「この育成・強化プロジェクトに参加して、本当に何か一步前に進めるのだろうか」と不安な気持ちでいっぱいの中、プロジェクトが始まった。

大波さんの取り組み

■「15の力」でNPOを知り、基礎力が身に着いた

育成・強化プロジェクトへの参加当初、大波さんは自身の課題意識について「判断力を高めたい、他の団体との関係を構築したい、団体の管理運営について勉強したい」と記載している。一方、「NPOのことをまったく理解していなかったので不安もありましたが、良い機会だと思いました」とも言っている。放射能の不安とそれに関わる悩みをもつ地域の保護者に向き合いながら活動を続ける大波さんにとって、**NPOを磨く15の力**で身に着けたNPO運営の基礎は、その後の活動の土台となって効き目を発揮する。育成・強化プロジェクトで作成したワークブック「NPOリーダーのための15の力」を、大波さんは積極的に活用し、スタッフ育成にも利用した。助成金事業を実施する際に集まったスタッフ同士の活動をささえるガイド的な役割を果たす1冊になっている。

団体と活動の変化

	起	承	転	結	
	2011年	2012年	2013年	2014年	
団体の経過	発災後、保護者の集まりを経て、団体立ち上げ	育成・強化プロジェクトに参加	育成・強化プロジェクトの助成金で新規事業を開始	団体の会員制度ができる、3つの活動の柱ができる	
活動状況	NPOをまったく知らない。県外支援団体から強力なサポート	NPOを知る。団体運営を整える必要性を感じる	保護者の声を活かして、新規事業の申請書を本格的に作成	共感者の拡大と新規事業の検討をスタッフと共に開始	

■「実践応援プログラム・基盤整備コース」に申請、採択はされなかったが大切な経験に

育成・強化プロジェクトの実践応援プログラム・基盤整備コースに、大波さんは2012年冬、拠点整備やスタッフのスキルアップに関わるテーマで申請書を作成した。さまざまな人からの助言やアドバイスを得ながら申請書を作成するという機会は初めて。このコースで、申請書が一定のレベルに到達するまで加筆・修正を繰り返してもらい、参加メンバーの力量アップを狙った。大波さんが作成した申請書は、一度目は通らなかったため書き直して検討することになったが、結果的には途中で申請を断念した。メンターの岡山NPOセンターの副代表理事糸山嘉彦さんは、「自分が書いた申請書・申請内容がさまざまな人に、どんな風に読まれ、理解されているのかを気づく機会になったのではないのでしょうか。また、その資金提供の趣旨や目的をしっかりと考えるきっかけにもなったと思います」と語り、この経験が他の申請書を作成する時のヒントとなり、**組織力向上サポート助成**の採択につながったと分析している。

■メンター等とのやり取りからNPO運営の悩み解決・ノウハウ獲得へ

大波さんは2013年秋、育成・強化プロジェクトの**組織力向上サポート助成**に応募し採択され、企画の実施にいたったが、その過程ではメンターである糸山さんのアドバイスや情報提供が重要なヒントになっていた。

活動して丸2年を迎えた2013年夏、大波さんは活動に行き詰まりを感じていた。「支援団体にとって自分たちはお荷物になっているのではいか」、「団体を閉じようか」。現状と今後への不安だった。そんな際に、メンターの糸山さんやプロジェクト事務局のスタッフに相談したところ、さまざまなモノの見方や考え方を気づかせてもらうことができた。糸山さんからフードバンクという活動の情報提供を受け、以前より保護者から「安心安全な野菜などの食品を子どもたちに食べさせたい」という声を聞いていたこともあり、すぐに関心を持ち、団体の活動として実施すべきではないかという感触をもった。その後、糸山さんより特定非営利活動法人フードバンク岡山の情報を収集。そして、それまで継続的に支援してくれていた岡山の団体からも励まされたことなどを通して、「多く



企業から提供された食品を仕分けをして、配布に備えるスタッフ(提供:小国からの笑顔)

の応援してくれる方々に応えるためにも、小国からの笑顔は外部支援団体から自立して活動していこう」という思いを固めた。これが**組織力向上サポート助成**への申請へとつながり、新規事業「食の安心プロジェクト」という活動の柱の1つに成長した。団体スタッフの佐藤匠さんは「食の安心プロジェクトでは、大波さんが先頭を切って他団体と交渉してくれました。活動を進めるなかで、より一層自ら考え、判断し進めるリーダーシップ力に頼もしさを感じ、自分も頑張りたい!と強く思うようになりました」と大波さんの変化を話している。

■福島メンバーとの交流・相談が日常活動での知恵袋とエネルギーに

大波さんは育成・強化プロジェクトに参加して得たこととして、福島県内のネットワーク、3県内のネットワーク、共感相談できる仲間、を挙げる。震災後の活動のスタイルは、地域の保護者と県外の支援団体との関わりでの事業が主であったため、福島県内のNPO等と出会い連携する機会は少なかった。育成・強化プロジェクトは、県内から約20団体が参加していたため、研修会や合宿を通じて交流することができた。例えば、小国からの笑顔で講演会を実施する際には、福島県内のNPO中間支援組織である「ふくしまNPOネットワークセンター」や「市民公益活動パートナーズ」から参加しているメンバーに、広報や事業実施の悩みを相談し、アドバイスや協力ももらうことができた。また、子ども支援というテーマでは、「ココネット・ママ」からのキャンプ参加者と連携。保養



立ち上げた団体のホームページ

キャンプの情報交換や福島メンバーの自主勉強会の企画運営を通じて、悩みや不安を語り合い、共有することができた。こういった仲間と巡り合えたことは今後の活動を継続していくうえでも大きな励みになったようだ。

成果と変化

■ ホームページや講演会PRでの広報作戦

「食の安心プロジェクト」の活動内容のなかには、「講演会の実施」、「団体ホームページの制作・運用」という団体の情報や思いを発信していくものがあった。そこで、活用したのが「伝えるコツ」（電通+NPO広報力向上委員会）だ。団体の目的、目標をどう表現するか。見やすく伝わるデザインの工夫をどうするか。この制作担当が、大波さんとスタッフの佐藤さんの2名だったため、「伝えるコツ」の冊子を熟読。団体での検討を経て伝えたい中身を固め、ホームページ制作会社との打ち合わせに臨んだ。仮案が提示されたあとも、修正をくりかえし現在のホームページが完成した。

また、講演会のチラシ作成にあたって、団体内で何度も議論。チラシを見た市民やNPO関係者の感想も取り入れながら何度も修正をして完成させた。その工夫も



「食の安心プロジェクト」講演会には、約30名が集まった。

あって2014年6月15日の講演会には地域住民ら約30名の参加者を得ることができた。

■ 会員制度をつくるためにスタッフ間で議論

2014年春には団体を継続して運営するために、会員制度についてスタッフと議論し仕組みをつくった。この時参考になったのは、15の力の「組み立てる力」と「見通す力」だった。団体が助成金頼りの運営をするのではなく、会費と事業費も得ながら運営するにはどんな仕組みにしたらいいのか、スタッフが一丸となり議論し考えた。

これからの活動を考えた時にどんな人が関わってくれる可能性があるのか。また夏と冬で活動内容が変わるなかで、どう伝えれば年間を通じた会員になってくれるのか。これもNPOの基礎理解がなくてはできない議論だったと思っている。

これから

今後は、団体の活動の共感者を増やし、気持ちで動いてくれる支援者獲得の取り組みをしたいと考えている。サロンや野菜提供のサービスを利用する会員、さらには主旨に賛同して連携してくれる協力団体や個人会員も増やし、いずれはNPO法人化を目指している。活動では、いただいた野菜を無駄にしないためにも、野菜を活用した加工品の製造などにも取り組んでいきたいと考えている。キャンプは、「保養」から徐々に「体験教育の場の提供」に変化しつつある。子どもや保護者が普段の生活に戻っていくにあたって、キャンプに参加できる日数や内容にも変化が出てきている。今後も活動の3つの柱「キッズ

キャンプ」、「サロン」、「食の安心プロジェクト」を充実させていく。

会費の種類

- 協力会員
サービスを利用しないけれど、応援して下さる個人の方
年会費 3,000円／1口
- 利用会員
月々の野菜のサービスを受ける方、サロンの割引もあり
年会費 3,000円／1口＋月会費1,000円
- 団体会員
会社・組織・団体として応援して下さる方
年会費 5,000円／1口



企業から寄贈された食品(提供:小国からの笑顔)

